

「3歳児神話」の認知と育児雑誌

――育児情報と早期教育環境の視点から

○山岡 テイ

庄司 順一

(情報教育研究所)

(日本子ども家庭総合研究所)

【はじめに】

乳幼児の発達を考える上で、初期体験や母子相互作用の重要性が提唱されてきた中で、3歳までの養育態度や環境で、その後の子どもの将来が決定されるという不安や焦燥感を抱いている母親が少なくない。そこで、いわゆる「3歳児神話」の言葉の定義や認知度に関する受容過程の実情を、乳幼児の母親の情報源として影響力がある、育児雑誌や実家の母親からなどの情報環境に焦点をあてて母親の意識を概観した。

【調査方法】

I. 予備的質問紙調査：時期は1998年3月。地域は東京及び名古屋。対象は幼児と小学生をもつ母親と保健婦・助産婦。中心年齢層は30代52.0%、40代が35.0%であり、第1子の年齢は小中学生が中心。保健婦や助産婦の中には子どもがいない女性が10人いた。調査方法は質問用紙を直接手渡しで回収した。集計数は100通。回答者の就労状況は専業主婦が49.0%、パートタイマー30.0%、常勤者21.0%であったが、保育の現場に携わる者やこれから外で働きたいという意識が高い専業主婦が多いことが特徴的であった。

II. 文献調査：上記の調査結果より、「3歳児神話」の言葉の入手経路として、「育児雑誌」が2位にあげられていたことを踏まえて、月刊育児雑誌「ベビーエイジ」「わたしの赤ちゃん」「ひよこクラブ」3誌で、それぞれ創刊号から1998年3月号までの全号の目次及び一部内容の検証を行った。方法としては、「3歳児神話」の記事内容としての取扱いと、1970年代から90年代までの各誌の3歳までの働きかけや乳幼児教育に関連する記事を時代背景を含めて考察した。

【結果と考察】

1. 「3歳児神話」の認知度

『「3歳児神話」という言葉を知っていますか?』の設問には、73.0%が知っていると回答していた。年齢別の認知度では30代が最も高く76.9%、つぎに40代が74.3%であった。母子保健関係者を含めても7割の認知度であった。『「3歳児神話」は、どのような内容だと思うか?』では、「3歳までの子どもへの働きかけが、その後の子どもへの成長・発達に大きな影響を及ぼす」と回答した人が82.0%でもっとも多く「3歳までは、とくに母親が子どもの育児を行うことが大事だ」

が53.0%、「この時期に子どもの情操や五感を育てると効果的である」39.0%と続いていた。30代と40代を比較すると、乳幼児をもつ母親である30代の母親達のほうが「この時期に子どもの情操や五感を育てると効果的である」が48.0%回答しており、40代の29.4%に比べて20%近く多かった。次に『「3歳児神話」という言葉をどこから聞きましたか?』の回答では「世間一般」49.0%「育児雑誌」27.0%「テレビや新聞」26.0%「育児書」14.0%「専門書」10.0%「その他」10.0%「友人・知人」8.0%「実家の母」4.0%の順であった。以上の結果では、育児雑誌やテレビ新聞などのマスメディアを中心にあげているものの、世間一般的な社会知識として言葉を認知していることを示していた。

2. 「母親による子育て」について

3歳児神話に関連して、2つの相対する意見から、回答者の考えに近いほうを選んでもらった結果では、「子どもが3歳くらいまでは母親が育てたほうがいい」は35.0%、「必ずしも母親でなくても、愛情をもって育てればいい」は65.0%であった。就労状況別にみると専業主婦は「3歳くらいまでは母親が～」は44.9%であったが、常勤者は28.6%と16.3%の格差があった。

調査対象の半数である専業主婦は、社会的な活動に従事する女性が7割を占めたことやポスト育児期の40代後半以降の年齢層も含まれていたことから、このような結果が出ていたと思われる。さらに、他の調査での、3～8歳児の母親達への同じ設問結果を比較すると「3歳くらいまでは母親が～」は74.3%で「必ずしも母親でなくても～」は25.7%という反対の結果になっていた。調査対象となった4,613人の母親達の就労状況は、専業主婦60.0%、パートタイマー27.3%、常勤者12.7%であった。母親の就労状況とクロス集計した結果では、「3歳くらいまでは母親が～」は専業主婦が81.3%、パートタイマーは71.9%、常勤者は46.5%の結果であった。これら両方の調査結果から「3歳くらいまでは母親が～」という意識は、母親の就労状況によって差異が出ており、仕事で働いたり外で社会的な活動している女性は「必ずしも母親でなくても～」という考えを支持する比率が高くなっていた。子どもの年齢や学年が上昇すると「3歳くらいまでは母親が～」を支持する比率が減少するかというと、必ずしもそう

とは言えない。未就園児の親は、「3歳くらいまでは母親が～」は80.7%と確かに高いが、年少児の母親は60.7%、年中児は74.0%、年長児74.7%、小学1年生75.4%、小学2年生75.1%と小学校入学時にもっとも高くなっていた。これと同様な数値の変化を示す内容として、「子どもの帰宅時間には、誰かが家にいるようにしている」の回答があげられる。小学校入学後の子育て意識の変化と親子の活動や生活時間のズレなどの不安などが、理由の一因として考えられる。(山崎, 1998)

3. 育児雑誌における「3歳児神話」のとらえ方

前述の調査結果では、「3歳児神話」という言葉を育児雑誌から得たと回答した人が3割近くいた。そこで、現在、発売されている主要な育児雑誌3誌の創刊号から1998年3月号までの全号の目次と一部関連内容記事を検証した結果、およそ30年の育児雑誌の歴史の中で、「3歳児神話」を直接的なテーマとしていた記事は見当たらなかった。ただし、「3歳児神話」の実質的な内容をどのように定義づけるかによっては、毎号のように、その関連記事が載っていたとも言えない。ここでは「3歳児神話」の定義を広くとらえて、育児雑誌の記事と関連する項目を、

- ①「3歳児神話」が直接のテーマになっているもの
- ②0～3歳までの働きかけの重要性
- ③母子相互作用や母性論(発達心理学や初期体験などの記事も含む)
- ④0～3歳までの五感教育・早期教育・知力、体力づくりやおけいこ事など
- ⑤大脳生理学・脳の発達に合わせた働きかけなどの5つに分類すると、①を除いて②から⑤に関連する記事は繰り返し登場していた。

4. 育児雑誌記事の変遷

現在、少子化時代の子育てをしている20代～30代の母親達の信頼する育児情報源は、「実家の母、近所の友人、園の先生、育児雑誌、夫」などで、育児の参考にする人としては、さまざまな人達の中から「実家の母」を一番にあげており、育児情報源や育児モデルとしても実家の母親の影響が強い。(山崎, 1991 山崎, 1995) 現在の母親達が乳幼児期を過ごした1970年代初期、つまり、実家の母親が子育てをしていた時代は、育児雑誌では、上記分類の②から⑤の記事が隔月、もしくは毎月掲載されており、早期教育ブームといわれた母親向けの乳幼児教育の啓蒙書が相次いで出版された。70年代はさまざまな幼児向けの習い事や教室など幼児教育産業が普及してきた時期でもあり、乳幼児のしつけや教育も特集記事として育児雑誌では扱われていた。

80年代になると、前抱き子守具や紙おむつの一般化に伴い「赤ちゃん連れの外出や旅」の特集や付録が増えていき、親子で「外出育児ネットワーク」を形成し

始めた。この時期の育児雑誌の特徴としては「赤ちゃんの能力を育てる」というような内容が本文記事から独立した別冊付録となり、これらの乳幼児教育の情報、が、何誌かある育児雑誌を差別化するような位置づけにまで重要視されていた。

ところが、90年代になってからは、とくに、過去3年間は、育児雑誌3誌ともにこの種の付録も特集も著しく減少してきた。育児雑誌の情報内容や果たす役割も時代とともに変化してきた。さらに「3歳児神話」の視点で見ると育児雑誌よりは、むしろ「胎教」から始まる働きかけということで、妊娠雑誌のほうが母体・母性啓蒙記事を積極的に扱っている傾向が見られたことや、育児雑誌よりは幼児雑誌のほうが教育記事が多く掲載している実情であることを付記したい。

【まとめ】

「3歳児神話」が母親に育児情報として、どのような媒体を経て受容されているのかを、主要な育児雑誌の記事の時系列比較で検証した。その結果「3歳児神話」という直接的な表現はされていないものの実質的な意味での3歳児までの働きかけが、子どもの能力を伸ばすことに大きな影響力があるということやこの時期の母子相互作用が重要であることが70年代から80年代には繰り返し述べられていたことが明らかになった。

また、近年では、乳幼児の能力を育てることを、専門家や教材にまかせる「育児の外注化」が行われていること、妊娠期や0歳時代からの親子スミミングなどが、本来の早期教育の範疇から、育児の一環として抵抗なく母親達の育児生活に同化していることも特徴的な傾向である。しかし、熱心なあまり子どもの意思を無視するような養育態度で、遊び時間を奪う日々の習い事や練習を強要している事例も少なくない。どこから強制になるのかは議論を要するが、早期教育の強制はマルトリートメントとみなすという観点からの検討も必要に思える。(山崎, 1996) 従って、今後も「3歳児神話」に関する母親の受け止め方を、育児情報や乳幼児教育環境の視点からの考察を深めていきたい。

※本研究は、平成9年度厚生省心身障害研究「少子化についての専門研究」(主任研究者：平山宗宏)の研究費の補助を受けた。

文献

山崎テイ: 1991年度版 育児白書 主婦の友社 1991

山崎テイ・若野信郎他: 母親達の育児情報の受け止め方に関する考察 厚生省心身障害研究 少子化時代に対応した母子事業に関する研究 平成6年度研究報告書: 308-320, 1995

高橋運宏・庄司順一他: 子どもへの不適切な関わり(マルトリートメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3) 日本子ども家庭総合研究所紀要 33: 127-141, 1996

山崎テイ・後藤真子他: 子育て生活基本調査報告書 ベネッセ教育研究所 1998